「気」の意味研究
－上代を中心に－

江ミーシン
広島女学院大学大学院言語文化研究科
mk097103@gaines.hju.ac.jp

1. はじめに

現代日本語では「気」という形態素は、人間の精神を表す使い方が多い。例えば「どうする気だ」、「元気を出せ」、「気が散って勉強できない」のように、単純語、複合語、慣用表現において人間の精神と関わる意味で用いられる。これに対し古代日本語では、表記は古代中国語と同じく「氣」であり、意味的にも古代中国語に類似しており、人間との関連性は少ない。このような違いを踏まえ、本研究は上代及び中古の文献の中の「氣」の用例を収集、分類することにより、古代中国と類似する「氣」が現代日本語としての「気」になる意味変化の過程の一部を明らかにする。

2. 先行研究

2.1 佐藤（1996）『一語の辞典　気』

佐藤（1996）は『一語の辞典　気』において、中国語の「気」の語源を始め、中国語の「気」の意味と、「気」が日本に伝来して以後どのように意味拡張していったのかを整理している。

〈中国〉

- 雲気なり（説文解字、气）
  ⇒ 晴れを陽気、曇りを陰気と呼び、陰陽思想の成立。
  ⇒ 気候の推移
- 氣は愾なり。愾然として声ありて形無きなり（釈名、気）
  ⇒天地自然の息。あるいは人間の生命活動の息
- 「もの」として捉えられるのではなく、感覚で感じ取られるのである。

〈日本〉

- 最初は意訳として「イキ」などと訓読みしたが、すぐに呉音の「ケ」と音読みもした。
- 近世は漢音の「キ」と読むようになり、主に人の心の動きを表すのに用いられる。
- 近代では、自然科学用語として「空気」「蒸気」「電気」などの語が用いられる。

2.2　赤塚（1996）「日本における『気』の歴史－文芸社会学の観点からー」

赤塚（1996）は日本語の「気(け)」が「気(き)」になる過程に重点を置いて研究を行っている。

- 中古の「け」:

人間､自然を支配する秩序なのであって､それは息､風のように身体や精神の中に入ってくる。同時に、草木、山河、天候をも支配している。「顕」、「怪」、「異」、「化」、「疫」などにしばしば移動する。

- 源平時代以後の「気」:

悪い「気」を払いのけて、よい「気」を積極的に自分の身体や精神に入れるという考え方が出てくる。例えば九世紀、十世紀の「ものの怪」は「物気」と書かれるようになる。すなわち「怪」を自分たちの「気」の持ち方の問題として捉えるようになった。

十四世紀の『太平記』になると、朱子学の輸入により「気」は盛んに使われだす。また、「気」と時間と関係する「機」の互換例もあり、「気ニ乗ル」のように内なる「気」を自ら操ろうとする意識も明らかである。

- 近世：

十七世紀に現代日本語の「気」の用法の基礎が完成する。

3.　研究方法

本研究では漢字の「氣」の意味に焦点を当てているので、読みに制限はしない。つまり「キ」のみならず、「ケ」、「ゲ」も研究範囲に入り、解釈の余地のある「烟氣(けぶり)」のような漢字表記も対象になる。ただし、借音で使った万葉仮名は元来の漢字の意味とは無関係のため、研究対象から除外する。人名と地名も除くことにする。(1)

現段階では上代に絞り、『古事記』『日本書紀』『万葉集』『日本霊異記』の四冊を取りあげ、(2)これらの中にある用例を意味の相違に基づき分類した。

4.　上代文献の用例分析

〈気象・陰陽〉

(1)　夫れ、混元既に凝りて、氣象(きしょう)未だ効れず。（古事記上巻幷序）

(2)　日本の諸將と、百濟の王と、氣象(あるかたち)を觀ずして、相謂りて曰はく、「我等先を爭はば、彼自づからに退くべし」といふ。（日本書紀天智二年）

(3)　二氣(にき)の正しきに乗り、五行の序を齊へ、神理を設けて俗を奨め、英風を敷きて國を弘めたまひき。（古事記上巻幷序）

(4)　蓋し大蛇居る上に、常に雲氣(くも)有り。（日本書紀神代上）

(5)　六月朔日に至りて、忽に雨雲の氣を見る。仍りて作る雲の歌一首　(万葉集四一二二序文)

氣象は気と象（形・質）とであり、二氣は陰陽である。(4)と(5)の「氣」は雲あるいは雲の形を表すのに使われ、古代中国語の意味と変わらない。

〈呼吸の息〉

(6)　吹き棄つる氣吹の狭霧に成れる神の御名は、多紀理毘賣命。(古事記天照大神と須佐之男命)

(7)　吹き棄つる氣噴の狭霧に生まるる神を、號けて田心姫と曰す。(日本書紀神代上)

(8)　氣は朝霧の如く、足は茂林の如し。(日本書紀景行四十年)

(9)　氣の緒に思へるわれを山ぢさの花にか君が移ろひぬらむ　(万葉集一三六〇)

(10) 幻の如く氣を絶ち、寐るが如く命終はりぬ。(日本霊異記下巻)

「氣吹の狭霧」は「吹き出す息吹の霧」の意である。(6)と(7)とは「氣」を含む熟語の表記が異なるが、「氣」そのものの意味は同じである。呼吸の息の意味として使われており、古代中国語の意味と類似している。

〈疫病〉

(11) 故、意富多多泥古を以ちて、我が御前を祭らしめたまはば、神の氣起らず、國安らかに平らぎなむ。」とのりたまひき。(古事記崇神天皇)

(12) 時に神、毒氣を吐きて、人物咸に瘁えぬ。(日本書紀神武天皇即位前紀)

(13) 能く諷歌倒語を以て、妖氣を掃ひ蕩せり。(日本書紀神武天皇元年)

(14) 後に、國に疫氣行りて、民夭殘を致す。(日本書紀欽明十三年)

以上の四例の共通の特徴は良くないことを指しているのである。「神の氣」は神の気配の意であるが、ここは神のたたりの意、すなわち疫病を指す。「毒氣」は神に吐き出された息であるが、疫病の意で使われている。

〈人から発したもの、気性〉

(15) 少くして雄抜しき氣有します。(日本書紀綏靖天皇即位前紀)

(16) 汝、我が氣に病まむが故に、依り近づか不あれ。(日本霊異記下巻)

(17) 深き氣至れる誠ありて、遠く朝貢ふことを脩つといふことを知りぬ。(日本書紀推古十六年)

(15)は「息を吐く勢い」から転じて気性、容子を表すものである。(16)は人から発し、ほかに影響を及ぼすエネルギーのようなものであり、「息を吐く」という動作から深く関わると言える。(17)は「こころばへ」と訓むが、現在の段階では難解であり、人間との関係に基づきこの分類に属することにする。

〈可視的な自然現象〉

（18）南の方に烟氣(けぶり)多く起つ。（日本書紀景行十二年）

（19）羽を飯(いひ)の氣(け)に蒸して、帛を以て羽に印して、悉に其の字を寫す。（日本書紀敏達元年）

「氣」を使って雲と類似しているが雲ではない自然現象を表し、比喩の一種である。

〈不可視的な自然現象〉

（20）天の暖なること春の氣(しろし)の如し。（日本書紀皇極元年）

（21）茨田池の水、漸漸に變りて白き色に成りぬ。亦臭き氣(か)無し。（日本書紀皇極二年）

（22）潮氣(しほけ)立つ荒磯にはあれど行く水の過ぎにし妹が形見とそ來し　（万葉集一七九七）

（23）日の光に非ずして、甚だ熱き氣(け)、身に當り面を炙る。（日本霊異記中巻）

鼻や肌で感覚で感じ取られるものであり、目に見えない空気の流れとしての「氣」の特徴が際立つ。

〈中国典籍の直接引用〉

（24）稟氣(よろづのもの)懷靈、何か得處ざらむ。（日本書紀成務天皇即位前紀）

出自は中国の典籍『昭明文選』。原文は詠歌の発生について論じている(3)が、「よろづのもの」という訓をとる理由は現在調査中。

5.　まとめ

- 古代中国語と類似あるいは同じ意味として使うものが大多数である。中国典籍の文章をそのまま使う例もある。
- 漢文で書かれたため、固定の読みがなく、意味により読み方を決める。
- 中国と相違の用例の出現。中国では「神氣」は神の出現の兆候であり、多くは雲の形で表し、神聖かつ縁起のいいものである。それに対し日本の「神の氣」は神の吐き出す息であり、疫病を指すものである。

注

1） 例えば万葉仮名で書かれた歌謡、あるいは「大氣津比賣神(おほけつひめのかみ)（人名）」、「氣多(け た)（地名）」などは除外する。

2） これらの作品の用例は『日本古典文学大系』岩波書店によった。

3） 「雖虞夏以前，遺文不睹，稟氣懷靈，理或無異。然則歌詠所興，宜自生民始也。」『昭明文選』宋書謝霊運伝論

参考文献

赤塚行雄（1996）「日本における「気」の歴史―文芸社会的な人考察として―」『日本語学』15-7：9-19

佐藤喜代治（1996）『一語の辞典　気』三省堂